ソウル歴史散歩　　足立　龍枝

慶熙宮～仁王山ふもとを歩く

（1） 悲劇の慶熙宮

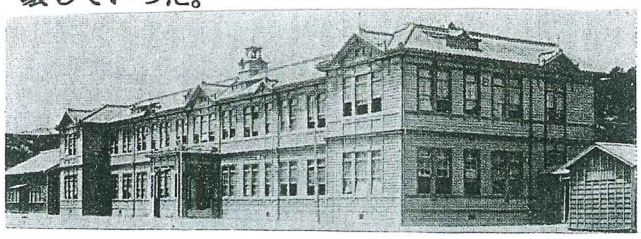
韓国の５大古宮と言われている宮殿は、朝鮮時代（１３９２年～１９１０年）に建てられた。その中で、直接・間接に壬辰倭乱の被害を受けなかったのは、慶熙宮だけ。倭乱以降１６００年代になってから光海君（１５代国王）によって建立されたからだ。

倭乱による被害はなかったが、日本の植民地支配によって、慶熙宮は、すべてを失ってしまった。

（以下、ソウル歴史博物館発行の資料「西闕―慶熙宮」他を参考にしています）

１９０５年、第２次日韓協約（日韓保護条約）が結ばれると、日本人が朝鮮に多数移住するようになった。そして、居留地域が拡張され、その子弟たちを教育するための学校が必要となった。

１９０９年には、居留民団立中学校が慶熙宮の近く、昔の独立館に設立され、統監府が引き継いだ。続いて１９１０年には総督府に変わり、総督府中学校になった。そして、１９１５年には、京城中学校に改称。１９２５年には、京畿道に移され、京畿公立中学校となった。総督府中学校になったころから、中学校は、慶熙宮を売り払い、破壊していった。



Postcard with Photo of Gyeongseong Middle School Main Building
京城中學校 本館 葉書

ソウル１００年の歴史写真を見ると、慶熙宮の正門である興化門の前で、白衣のお年寄りが座り込んでいる写真が印象に残る。両側に土塀は残されているが、開いた門から宮殿の中を見ると、あるはずの建物がない。更地になってしまっている。総督府が売却処分したのである。正殿・崇政殿は、日本の仏教宗派である曹洞宗・曹渓寺に売却された。会祥殿も曹渓寺に売却。

正門である興化門は、道路拡張工事のために位置も方向も変わった。

その後、１９３２年、南山中腹よりやや下の方に建てられた伊藤博文の菩提寺・博文寺に売却されて、寺の正門になった。

日本からの修学旅行生は、朝鮮・旧満州へ行くコースが多かった。京都の女学生だった人から、博文寺へ参拝した話を聞いたことがある。当時の京城遊覧バスパンフのコースにも見られる。

このように１９２０年代を過ぎたころには、宮殿の建物は、一部回廊を残すだけとなり、ほとんど完全に消えてしまった。

以上のようにして建てられた京城中学校の校舎の奥、宮殿の西側の崖のようになったところに、生徒たちの手で防空壕が掘られたのである。かなり大きい防空壕で、８０年代初めに見た時には、草が生い茂り、入り口がかろうじて分かる程度だった。奥は広くて倉庫代わりに使っていたようだ。

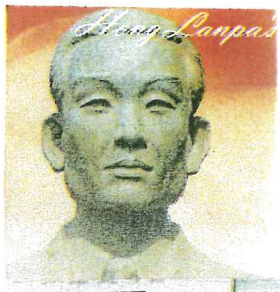
撤去するか保存するか話し合いもされたようだが、結局残すことになり、写真のように残された。

京城中学出身の梶山季之・申相玉監督等も防空壕作業をした年代だが？

（２）慶熙宮から仁王山の麓・散策コース

（仁王山の頂上登山コースは通信２８８号
飛田雄一さんの紀行文をお読みください）

８・１５光復節の前夜（８月１４日）夕方から西大門区の主催で超一流音楽家によるコンサートが行われます。刑務所で亡くなった独立運動家・民主化運動家などを追悼するために、午後８時から、獄舎に挟まれた芝生広場で行われます。椅子もありますが、芝生でごろんとひっくり返って鑑賞している人が多いです。雨が降ったら、１５日に延期。プログラムは、５月現在未定

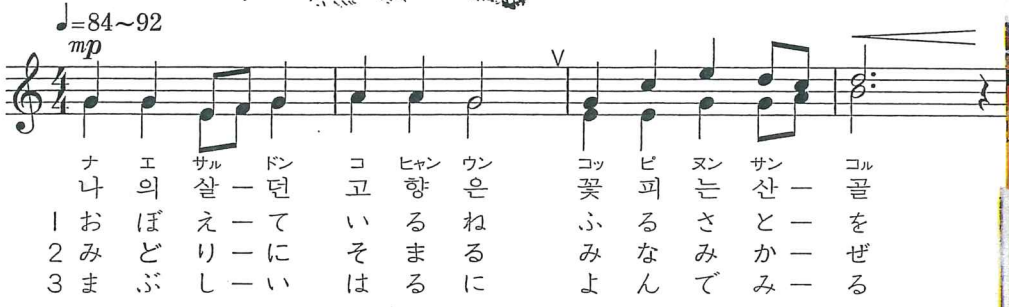


ふるさとの春

イ ウォンス 作詞／海野洋司 日本語詞／ホン ナンパ 作曲／岡部栄彦 編曲

２００５年発行

教育芸術社（小学５年用）



mf 洪蘭坡の家を訪れたのは、２００８年夏ごろだった。

４月に洪蘭坡は、民族問題研究所により、親日人名事典にリストアップされた直後だった。入り口には鍵がかかっていた。あらかじめ観光公社で訪問の仕方を聞いていたので、ブザーを押した。感じのいい男性大学生の孫が応対してくれた。おもてなしを受けたジュースの味を思い出す。名前が「洪」ではなかったので、孫の父方の姓だったのだろう。

展示室はグランドピアノが置かれたやや広いワンフロア。そのころは、月１回の金曜日にコンサートが開かれていたが、今（今年５月）は開いていないとのことだった。

同じ時期、生家のある華城へも行った。生家を中心に公園化する計画が中止になっていた。

また、学校で、洪ナンパの曲が歌われていないか厳しく監視が続いているとも聞いた。

遺族が親日反民族行為糾明委員会を提訴したことにより、２００９年１１月に発表された親日派リストからは除外された…というものの、先日の訪問では、入り口に鍵をかけ、簡単には解決されていないと感じた。

ところで、洪蘭坡がリストアップされたことで、一番大きな打撃を受けたのは、日本の子どもたちではないだろうか。２０１２年の教育芸術社の教科書を見ると「ふるさとの春」は消えて「アリラン」に変わっていた。リストから外れたからといって「ふるさとの春」には戻らない。

朝鮮神宮と初代国師堂　～上から見下ろすとは！～

１９８０年代の学生センターセミナーで何回か聞いた言葉。金達寿さんをはじめほかの先生方の話だったと思う。

１９１９年に朝鮮神宮を南山に創立することになった。

現植物園が拝殿のあったところ。その上に檀君を祀る「国師堂（クッサダン）」があった。韓国シャーマニズムの聖地と言われるところで、李成桂が建てた。

ところが、朝鮮神宮を上から見下ろすとは何事ぞ！ということになり、西の仁王山（日本統治時代は、王という字は日ヘンに王➡旺という造語漢字を使っていた）の中腹に国師堂は移転した。

地下鉄独立門辺りから坂を上ったところ、城壁に突き当たる手前にあった。堂の中にムーダンの衣装や道具が飾られていて、参拝する人が絶えなかった。２代目国師堂を案内してくれた１９３４年生まれの地域の近現代歴史通の金さんの話によると、堂の前のやや広い民家では、独立運動の秘密会議が行われたそうだ。日本人（総督府の役人から警官に至るまで）は、見たことのない国師堂のムーダンに怖れをなし、秘密会議の現場には近づけなかったそうだ。３代目の国師堂は、宅地開発のための移転で、不便な仁王山のさらに山へと追いやられたが、お詣りする人の姿は、相変わらず続いている。